

『季刊三千里』の立場(2)*

一金日成主義批判による北韓との決別一

朴正義**

(e-mail : kannan322@hotmail.com)

目次

- 1 はじめに
 - 2 新しい社会主義
 - 3 掟として
 - 4 英雄史観として
 - 5 異論を許さない
 - 6 おわりに
-

1.はじめに

今回の報告は、『日本文化学報』48輯に載せた拙著「『季刊三千里』の立場(1)一総連との決別」の後続編と捉えてほしい。前回、『季刊三千里』が総連の別働隊でなかったことを、総連との確執を見ながら明らかにしたところである。しかし、そこでの総連批判は体質批判で終わり、その本質である指導方針批判までには及んでいなかった。

総連は、全在日朝鮮人の権益擁護のための自主団体として発足したが、その後、北の「海外公民団体」として北の権益擁護を果す団体に変貌し、その唯一指導方針として北の「金日成主義」をそのまま受け入れた。即ち、この「金日成主義」批判がなされない限り、総連批判は行われていないのに等しく、さらに北に対する『季刊三千里』の立場も明確にできない。

『季刊三千里』での「金日成主義」批判は、総連の活動家であった林誠宏氏と編

* 이 논문은 2011년도 원광대학교 교내연구비로 연구함.

** 원광대학교 일어교육과 일본학

集委員姜在彦氏との対談「金日成主義を問う」(『季刊三千里』三十七号)¹⁾という形で行われた。林誠宏氏は、総連の組織を離れた後も社会主義者であることを標榜しつつ、精力的に『裏切られた革命』(創世記 1980年)、『私は何故金日成主義批判を書くか』(創世記 1981年)、『甘やかされた朝鮮』(三一書房 1982年)、『あばかれた掟』(啓文社 1983年)などの執筆を通し、金日成の独裁政権そしてそれを受け入れた総連を批判し続けてきた。対談は、姜在彦氏が林誠宏氏の話を書く形で進められ、内容はあくまでも林誠宏氏の個人的見解であるが、単純な寄稿文でなく対談を組んだことから、『季刊三千里』の立場を代弁したものと言える。そして、金日成主義批判は、北さらに金日成批判に通じるものでもある。

最初に断っておくが、ここで、『季刊三千里』の主張が正しいかどうかを問おうとしているのではない。北そして総連の指導理念である「金日成主義」を、どのように判断しているかによって、北に対する『季刊三千里』の立場を確認するものである。

2.新しい社会主義として

朝鮮戦争以後、金日成の独裁政権が強化されにつれ、「人は全ての主人であり、一切を決定する」、即ち「人間中心」の朝鮮独自の革命思想が唱えられるようになり、それが「主体(チュチュエ)思想」としてまとめられた。そして、いつのまにかそれは「金日成思想」とも呼ばれるようになり、「主体(チュチュエ)思想」の名称と併用されてきた。さらに、1970年に入り金正日によって「金日成主義」というように「主義」として確立され、朝鮮の独自の革命思想を越えて世界人民全てが目指すべき革命思想として宣伝されてきた、というのが金日成主義の成立過程の一般的見解である。

座談会にて、まず、「金日成主義」と呼ばれるようになった過程を、姜在彦氏が、

とくに66年の第二次朝鮮労働党代表者会議いこう、思想状況が変わってきて、たとえば『首領さまの教示のほかは何も知らない主体型の活動家』といいだして、いつのまにか『金日成思想』という言葉が使われた。2)……それから74年頃に『金日成思想』が『金日成主義』となって来ます……『主義』というからには、それ独自の哲学的基礎がなければならないわけでしょ。従来われわれは『社会主義者』イコール『マルクス主義者』と考えていた。そのマルクス主義との関連はどのように言っている訳ですか。3)

1)林誠宏「『金日成主義』を問う」(『季刊三千里』三十七号 三千里社 1984年2月 p.p.134~141)

2)上掲書 p.132

3)上掲書 p.133

と、金日成主義の成立過程を一般的見解で語り、金日成主義と、「主義」を使用しているため、同じく「主義」であるマルクス主義との関係を問題視した。

なぜならば、1972年の改正憲法第1章第4条においても「朝鮮民主主義人民共和国は、マルクス・レーニン主義をわが国の現実に創造的に適用した朝鮮労働党の主体思想を自己活動の指導的指針とみなす」(朝鮮民主主義人民共和国憲法 1972.12.28.)とあるように、初期の段階では金日成主義はマルクス主義を発展させたものと、北では主張されてきた。このため、金日成主義とマルクス主義との相関関係が最初に問われたといえる。同時に、「主義」として金日成主義が成立しえるのかも問われている。

金日成主義の他にも、「レーニン主義」や「毛沢東思想」があるが。レーニン主義は、マルクス主義をソ連の実情に合わせて発展させたものであり、「一国社会主義論」がそうである。しかし、あくまでもマルクス主義の枠内にあり、正式にはマルクス・レーニン主義と呼ばれている。また、毛沢東思想もマルクス主義を中国の現状に合わせて作り出したものであり、レーニン主義は否定しているがマルクス主義は否定してなく、「主義」という言葉も使っていない。ただ、金日成主義だけが、マルクス主義を越えた主義を主張している。

これに対して、林誠宏氏は、

イズム(主義)の誕生は74年(十代原則及び『朝鮮新報』の論文)で、それ以前はイズムではなかったと思うんです。74年、『朝鮮新報』紙上に発表された論文で重要なことを言っていて、一つは、金日成主義が弁証法的唯物論ではないということと、もう一つは物質的概念について非常に否定的に取り扱っていることです。この二つは哲学的には急所なんです。この二つをもって金日成は従来のマルクス主義とは違った立場をとり、そしてまた、自分達の金日成主義はこの点でマルクス主義とは違うんだということ強調したわけだから、これは明らかに一つのイズムとしてあるんです。4)

と、金日成主義においてマルクス主義の哲学的基礎である弁証法的唯物論を否定しているため、金日成主義はマルクス主義と異なる哲学的基礎で成り立っているといい、一つの「主義」として成立すると評した。

これは、金日成主義の創始者ともいえる金正日も「何よりもチュチェ思想の優越性と獨創性を、マルクス主義唯物論弁証法の見地で解釈しようとする偏見を克服しなければなりません」5)と、マルクス主義とは別の次元のもので、独自の主義であると主張している。

さらに、当時の金日成主義心棒者である朝鮮大学6)副学長朴庸坤氏は、「チュチェ思

4)上掲書 p.134

5)『金日成誕生50周年記念研究論文集』チュチェ思想国際研究所(東京) 1992年 p.103

6)日本における朝鮮学校の最高教育機関に位置づけられる。学校関係者は大学水準の教育を行っていると主張して

想とマルクス・レーニン主義との関係において、チュチェ思想の獨創性を基本にしながら繼承性を考察する基本的立場を堅持するとき、はじめてチュチェ思想の神髓を把握することができる」⁷⁾。と、マルクス主義を単に繼承したのではなく、獨創的な主義とのべて、さらに続け、「時代の発展とともに、社会思想が発展することは誰も否定することの出来ない事実である。……周知のようにマルクス主義弁証法はフォイエルバッハの形而上学的唯物論と、ヘーゲルの観念論的弁証法を止揚して確立された。しかし、マルクス主義哲学をフォイエルバッハやヘーゲルの哲学の枠内で解釈するマルクス主義者はありえな。それは唯物弁証法がフォイエルバッハの形而上学的唯物論とヘーゲルの観念論的弁証法の繼承発展であっても、それが全く新しく獨創的なものであることを認識しているからである。それにもかかわらず、チュチェ思想の場合、今なおマルクス・レーニン主義の枠内で解釈しようとする偏向が残っている」⁸⁾と、マルクス主義とは異ると説き、「マルクス主義哲学は、世界は物質によってなりたっており、それはたえず変化発展するという原理を明らかにすることによって、観念論と形而上学を克服する上で歴史的な役割を果たした。チュチェ思想は、哲学の根本理念が人間の運命開拓の道を解明するという認識に立って、人間と世界との関係、いいかえれば、世界でしめる人間の地位と役割を解明することが哲学の根本問題であることを提起し、人間中心の哲学的世界観を確立した。これは従来の哲学の根本問題を発展させたものである」⁹⁾と、マルクス主義は世界が変化発展する原理を明らかにすることどまったが、金日成主義は世界の変化発展における人間の地位と役割を解明した新しい主義だと主張している。

このような金日成主義心棒者を評して、『北朝鮮王朝成立秘史一金日成正伝一』を著した林隱¹⁰⁾は、「この金日成の主体思想、つまり金日成主義はわれわれの時代を代表する思想を自認し、世界の全ての被搾取、被圧迫人民に闘争目標と方法を提示する指導思想として、マルクス・レーニン主義に挑戦した。言い換えれば、金日成主義は、レーニン主義を否定し、マルクス主義に代わる思想であり、理論であると主張している」¹¹⁾と、

いるが、文部科学省から大学としての認可を受けていないため、法律上は各種学校である。設置者は日本国の「私立学校法」に基づく『学校法人東京朝鮮学園』であり、在日本朝鮮人総聯合会（朝鮮総聯）や朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）当局から支援を受けている。1956年に、東京朝鮮中高級学校（東京都北区下十条町）敷地にて創立、1958年に2年制から4年制となる。1968年に東京都知事により各種学校扱いとなる。

朝鮮大学校は全寮制であり、東京都小平市小川町1-700にキャンパスを有し、人文科学・社会科学・自然科学3分野の各学部が存在する。学部として、政治経済学部・文学歴史学部・経営学部・外国語学部・理工学部・教育学部・体育学部・短期学部がある。

韓国にある、朝鮮大学とは無関係である。

7) 『金日成誕生50周年記念研究論文集』チュチェ思想国際研究所(東京) 1992年 p.102

8) 上掲書 p.p.102~103

9) 上掲書 p.p.103~104

10) 林隱は匿名で、北朝鮮から旧ソ連に亡命した許真(本名:許雄培)と言われている。

11) 林隱『北朝鮮王朝成立秘史一金日成正伝一』自由社 1972年 p.246

指摘した。

金日成主義心棒者が「主義」と主張するからには、基礎とする思想があるはずである。ここで、この金日成主義の基礎となる思想は何かを、姜在彦氏は

『朝鮮新報』に掲載された74年の論文によれば『マルクス主義世界観の基本は弁証法的唯物論である』が、「偉大な金日成主義は弁証法的唯物論ではなく、人類思想史においてはじめて発見されたチュチュ(主体)思想を根本礎石とする不滅の思想理論であり、この独創的な革命思想の全般体系は、チュチュ思想の基礎の上に成り立っている」と、つまり、マルクス主義は弁証法的唯物論を基礎としているのに対し、金日成主義はチュチュ思想を基礎としている意味では、別次元の思想であることが強調されているわけですね。¹²⁾

と、「金日成主義」は主体思想を基礎として成り立つと指摘している。

ここで主体思想を述べる前に、マルクス主義＝社会主義と一般的に考えられてきたため、主体思想を基礎とした金日成主義が社会主義と北で解されているかをまず問いておく。2009年に改正した憲法の序文に「朝鮮民主主義人民共和国は、偉大な首領金日成同志の思想と領導を具現した主体の社会主義祖国である」とあり、この「金日成同志の思想と領導を具現した主体」は主体思想を示すものである。さらに第1章第1条には「朝鮮民主主義人民共和国は、全体朝鮮人民の利益を代表する自主的な社会主義国家である」と銘記されており、ここでの「自主的な」は主体思想を意識して書かれたといえる。北は憲法において、自国をマルクス主義を基礎とする社会主義国家ではなく、「主体思想の社会主義国家」と規定した。即ち、金日成主義は主体思想を基礎とする社会主義と、社会主義の定義も新たに定めたのである。

そして、「金日成主義」が基礎とする主体思想に対し金日成主義心棒者たちは、「偉大な首領金日成同志におかれて創始なされた永久不滅の主体思想と、彼によって明らかにされた革命と建設に関する理論と方法は、我々の時代の革命的改造過程を促進する偉大な推進力となり、時代の進むべき前途を照らす羅針盤となった。まさに主体思想が創始され、我々の時代が自己を代表する指導理念を持つようになったことで、世界の全ての被搾取、被圧迫人民は、はっきりとした闘争目的と闘争方法をもって、勝利の自信も高らかに、自分の運命を切り開いて行くようになった」¹³⁾と、世界全人民に闘争目的と闘争方法を示した新しい思想と、金日成の主体思想を絶賛している。

ならば、主体思想とは何かとなる。基本的命題としての「人は全ての主人であり、一切

12)林誠宏「『金日成主義』を問う」(『季刊三千里』 三十七号 三千里社 1984年2月 p.134)

13)『自主の旗を高く掲げてすすむ第三世界人民の革命偉業は、必ず勝利するであろう』平壤、社会科学院出版社 1975年 p.17(林隠『北朝鮮王朝成立秘史一金日成正伝一』自由社 1972年 p.246からの二次引用)

を決定する」以外に、金日成の言葉として、「人が全てのものの主人であり、全てのことを決定すると言うことが主体思想の基礎であります」（『金日成著作選集』6巻 p.277）

「世の中で最も貴重なものは人であり、最も力のある存在も人であります」（『金日成著作選集』6巻 p.277）「人にとって自主性は生命であります。人が社会的に自主性を失えば、人であるとは言えず、動物と異るところがありません」（『金日成著作選集』6巻 p.273）「主体思想とは一言でいえば、革命と建設を推進する力も人民大衆にあるという思想であります。言い換えれば、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を切り開く力も自分自身にあるという思想です」（『金日成著作選集』6巻 p.268）、と主体思想の根本理念は「人間中心」と述べた。

もっともな話であるが、だから「人間」とは何かという問いが生じる。しかし、具体的には話されていない。これに対し、『季刊三千里』において、林誠宏氏はこの「人間中心」を評して、

残酷な言い方をしますと、主体について金日成の言っている「人間中心」という言葉は二行か三行で片付けられていて、それ以上言うことはないようです。これは床屋か風呂屋でする政治談義の水準の話です。……ここで、歴史を研究している姜さんにお尋ねしたいのですが、歴史書で人間以外を中心に書いたものがありますか。14)

と、金日成の「二行か三行」の言葉は、歴史の中心として人間があるとスローガンのように述べられているだけで、思想として論議する価値のないものと断言した。歴史と人間との関係に対して、歴史家である姜在彦氏は答えて、

すべての歴史は人間中心であり、しかも歴史を動かす原動力は人民大衆であるのはあらゆるもの前提です。ところが金日成主義の場合、それを無限定に唐突にもってきて、「人間がすべての主人であり、すべてを決定する」を大発明だというわけです。15)

と、「歴史を動かす原動力は人民大衆」であるのは当然であって、それを金日成が最初に創造したかのように宣伝していると皮肉り、理論的根拠付けなく単に「人間中心」というに過ぎず、その人間に対する規定そのものが曖昧であることを指摘した。

実際、「人間中心」を唱えたのは金日成が人類史上はじめてではない。古代ギリシャの劇作家ソポクレス(B.C.496～406年)は、「この世に偉大なものは多いが、人より以上に偉大なものはない」、また古代ローマの歴史家ガイウス・サルスティウス(B.C.86～38年)は、全ての人は自己の運命の創造者であると語っている。さらに、奴隷社会、封建社

14) 林誠宏「『金日成主義』を問う」（『季刊三千里』 三十七号 三千里社 1984年2月 p.135）

15) 上掲書 p.135

会、そして、資本主義社会においても、人間の尊厳と社会的解放と自由のために闘った思想家は、全て「人間中心主義」を唱えている。つまり、2000年も前から繰り返し唱えられている命題にすぎない。

金日成主義心棒者は、この「人間」を「人間も物資ではあるが、物質一般ではなく自主性と創造性、意識性をもった社会的存在であり、最も発展した物質である」¹⁶⁾と規定し、人間とそれを取り巻く物質世界との関係を、「意識と物質との関係ではなく、意識を持った最も発展した物質と意識を持たない物質との関係である。発展した物質と低い発展段階にある物質との相互作用において、発展した物質が主導的な位置を占め、より大きな役割を果たすのは明白である」¹⁷⁾と、意識を持った物資である人間が意識を持たない物質世界を主導するという、世界における人間の優位を示し、さらに人間の使命として、「自主性を創造性、意識性をもっている人間は、自己を取り巻く世界に対して自主的で創造的にそして目的意識的に作用するので、環境に隷属することなく、世界で自主的な地位をしめ世界を改造発展させるのであり、自己の運命を開拓する上で決定的な役割を果たすのである。チュチェの哲学原理は、人間は創造的活動を通じて、自己の運命を自らの力によって絶えず開拓でき、また世界の主人としての地位を高めていくことを示している」¹⁸⁾と、人間は、自己を取り巻く世界に対して自主的で創造的に、そして目的意識的に作用する世界の主人にならなければならない、と説いている。

そして、金日成主義心棒者は主体思想を説明して、「チュチェ思想はまた、人間が自己の運命開拓において主人の地位を占めながら、決定的役割を果たすという哲学的原理にもとづいて、自己の運命を開拓するためにあらゆる活動において、自主的立場と創造的方法を堅持することを要求する。チュチェ思想が主張する自主的立場と創造的方法は、世界を単に変化発展する物質世界とみなすのではなく、それを創造的活動によって人間の自主的要求に変化発展させることを要求する、最も科学的で革新的な立場と方法である。……これに対して、マルクス主義哲学の根本的立場は『資本論』の序文で明記しているように、全ての事物の発展を自然史的過程として把握するところにある。それは、人間の自主的で創造的かつ目的意識的な活動によって行われる社会運動と、自然発生的に進行する自然の運動との差異をみたのではなく、社会の発展までも自然の変化発展の法則と同様に把握したことを意味する」¹⁹⁾と、創造的活動によって人間の自主的要求に変化発展させることを要求する、最も科学的で革新的な立場と方法と規定し、マルクス主義のように事物の発展を自然史的過程として把握することを否定している。

また、ロンドンにある朝鮮委員会が、トランスナショナル研究所(ワシントン・アムステルダ

16) 『金日成誕生50周年記念研究論文集』チュチェ思想国際研究所(東京) 1992年 p.104

17) 上掲書 p.p.104~105

18) 上掲書 p.105

19) 上掲書 p.105

ム)の社会主義研究計画、社会主義的アジア研究協会(ロンドン)、および憂慮するアジア研究会(北米)の援助を受けて著された『朝鮮はどうなっているか』に、主体思想を取り入れた朝鮮労働党の特有の目標を、物質的幸福(物質的刺激と同一視してはならない)の格段の重視、農民の「労働階級化」(中国のように、農民に学ぶのとは明らかに異っている)、社会全体の「知的向上」をあげて、主体思想のマルクス主義と異なる創造性を高く評価している。20)しかし、明らかに目標に達していないのが現実である。

さらに、金日成主義心棒者は、金日成をして「首領金日成同志におかれては、歴史上はじめて、我々の時代、主体の時代の新しい犠牲と要求を天才的英知で奥深に洞察され、永生不滅の主体思想を創始なされることによって、人類の進歩的思想と人民の革命的偉業の発展に世界的貢献をなされた」(『哲学論文集』六巻 平壤 1975年 p. 1)21)と、人類最高の知性の表出とみている。しかし、主体思想で一番大事な「人間中心」が具体的に示されていない。

これに対して、林隠は、マルクス主義の立場から「人間中心」に関して、「マルクス・レーニン主義の創始者たちは、人がこの世の主人であり、一番大事な存在であるということを加えて、被搾取階級の勤労大衆、物質的富をつくりだす労働者こそ、まさにこの世の真の主人であるという、人間の社会的及び階級の本質まで究明した。マルクス主義の創始者たちはさらに進んで、勤労大衆が世の中と人間社会の真の主人となるためには、搾取と圧迫の鎖を断ち切らねばならず、また真に自由で平等な身分となるためには、どのように解放闘争を組織し展開すべきかという、戦略と戦術まで『共産党宣言』で明示した。だから、共産主義者たちはこの宣言を人類最高の知性の表出とみるのである」22)と、マルクス主義においても、「人間中心」であると指摘し、金日成主義独自の発想ではないと指摘した。

『季刊三千里』においても、林誠宏氏は、マルクス主義の立場から「人間」を次のように説明している。

マルクスは「人間は労働するものであり、その労働は創造行為である」と規定しています。つまり、創造行為に参加するものが歴史の主人公と言っているわけですから、彼が人間というときにはプロレタリアートとして、ひじょうに具体的な例を出して規定しています」23)と、マルクス主義の立場での人間論を、「この世の主人が人間」であることを否定していなく、「人間は労働するものであり、その労働は創造行為である。

20)伊藤一彦他訳『朝鮮はどうなっているか』三・一書房 1980年 p.p.150~151

21)林隠『北朝鮮王朝成立秘史—金日成正伝—』(自由社 1972年 p.246)からの二次引用。

22)林隠『北朝鮮王朝成立秘史—金日成正伝—』自由社 1972年 p.246

23)林誠宏「『金日成主義』を問う」(『季刊 三千里』 三十七号 三千里社 1984年2月 p.135)

さらに、「人間」と言うものを説明して、姜在彦氏は社会主義的立場から

哲学分野でも人間は難しい分野ではないかと思うのですが、やはり人間というのは、その客観的な諸条件につねに制約されている。たとえば今日、全朝鮮民族が念願していながらも南北統一ができないのも、それを實現し得ない客観的な諸条件があるからでしょう。われわれ朝鮮人がなぜ人工衛星を飛ばせないのか。これもつまり科学技術の発展段階の歴史があり、それを支える工業の歴史に制約されてできないわけでしょう。そういうふうに素朴に考えてみると、マルクスが『ドイツ・イデオロギー』のなかで、人間とは抽象的、一般的なものではなく、「社会的諸関係の総体」といっていますけれど、その方がぴったりくる。24)

とのべ、さらに続けて、林誠宏氏は「立場」から人間を説明し、

たとえば「立場」ということに限定して考えてみますと、結局、姜さんがいまっているのは必然的に立場の問題になると思います。つまり人間というのは、無立場ではなにも見られないんです。社会関係の総体としての人間は、客観的諸条件のなかで、たとえ意識的であれ無意識的であれ、いつも自分の立場のなかでいきているわけです。25)

人間はいつも立場によって制約されていると述べている。これに対し、姜在彦氏は、

「人間がすべてを決定する」と言っても、自然と社会には必然的に一つの客観法則があるわけですから、われわれ人間は、客観的な法則の枠内でその法則を把握してそれを能動的に利用する、という制約されたものだと思うんです。26)

と、マルクスが人間を「社会的諸関係の総体」と規定していることを上げ、「金日成主義」の曖昧な人間論とは異なるものである、と指摘した。ならば、この「金日成主義」の人間論とは具体的に何か。

3. 掟として

労働党の「党十大原則」が、金正日が主体思想を金日成主義と宣布した後、1974年にその実践的な方針として出された。27)その内容は、「金日成主義」を党の唯一の思

24)上掲書 p.135

25)上掲書 p.135

26)上掲書 p.136

想大系として確立し、人民を金日成主義化するために必ず守らなければならない精神的な指針と行動規範である。一言で言って、「偉大な首領金日成同志」に盲目的に服従することを要求するものであり、北の住民は子供の時から暗記させられ、それに従わなければ罰せられるものである。28)「十大原則」は、北の政策や制度、市民生活全般において、朝鮮労働党の規約や憲法よりも優先され、北の社会を支配してきたといえる。

この「党十大原則」に対して、林誠宏氏は、

金日成主義の主体思想における人間論とうのは、一見無立場ですが、いろんな文献の関連性を良く読んでみると、明確な立場が見えてくるんです。一つには「党十大原則」29)が「掟」だということがはっきりいえます。法律というのは国家のシンボルですから、一応民衆の総意ということでしょう。ところが「党十大原則」というのは一つのグループの「掟」であって、国家の「法」ではないんです。それにもかかわらず、それに背いたら許さんと人民にいうんですから、近代的な法律概念さえも超越した中世的法、あるいは奴隷社会の法としての「掟」以外のなにもものでもない。そういう「掟」に忠実な人間であれ、ということを言っているわけです。30)

27)鄭銀淑『今の北朝鮮』中経の文庫(中経出版) 2008年 p.216

28)上掲書 p.217

29)①偉大な首領金日成同志の革命思想で全社会を一色化するために命を捧げて闘争しなければならない②偉大な首領金日成同志を、忠誠をもって高く仰ぎ奉らなければならない③偉大な首領金日成同志の権威を絶対化しなければならない④偉大な首領金日成同志の革命思想を信念とし、首領の教示を信条化しなければならない⑤偉大な首領金日成同志の執行において、無条件性の原則を徹底して守らなければならない⑥偉大な首領金日成同志を中心とする全党の思想意思的統一と革命的団結を強化しなければならない⑦偉大な首領金日成同志に学び、共産主義的風貌と革命的活動方法、人民的活動作風を所有しなければならない⑧偉大な首領金日成同志から授かった政治的生命を大切に守り、首領の大きな政治的信任和配慮に高い政治的自覚と技術により、忠誠をもって報いなければならない⑨偉大な首領金日成同志の唯一的指導のもとに全党、全国、全軍が一体となって動く強い組織規律を確立しなければならない⑩偉大な首領金日成同志が開拓された革命偉業を代を継いで最後まで継承し完成していかなければならない。という10原則であるが、この原則一つ一つに幾つかの項目がついている。

例えば、原則①の場合、5項目がついている。

①偉大な首領・金日成同志の革命思想によって全社会を一色化するために命を捧げて闘争しなければならない。首領の革命思想で全社会を一色化することは、わが党の最高綱領であり、党の唯一思想体系を確立する事業の新しい高い段階である。

・党の唯一思想体系を確立する事業を絶え間なく深めていき、また代を継いで継続しなければならない。

・偉大な首領・金日成同志が創建したわが党を永遠に栄えある金日成同志の党として強化・発展させなければならない。

・偉大な首領・金日成同志が建設したプロレタリア独裁政権と社会主義制度をしっかりと保衛し、強固に発展させるために献身的に闘争しなければならない。

・主体思想の偉大な革命的旗印を高く掲げ、祖国統一と革命の全国的勝利のためにわが国における社会主義、共産主義の偉業のためにすべてを捧げて闘争しなければならない。

・全世界において主体思想の勝利のために最後まで戦わなければならない。

30)上掲書 p.136

と、「金日成主義」は国家の法を越えた「掟」として存在していると結論づけた。

姜在彦氏も、

共和国では党的思想体系という場合、党員だけでなく、一般勤労者にも適用されるのが特徴ですよ。確かに共和国の憲法では、思想・信条の自由は保障されているはずで
す。しかし、「党十大原則」の(五)の最初の項目は「偉大な首領・金日成同志の教示
を、即法として、至上の命令として受け止め……」とあるわけですから、法の上に金日成
主席の教示があるということになる。³¹⁾

と述べ、「十大原則」を批判した。姜在彦氏が指摘した部分の前文は「偉大な首領・
金日成同志の教示をすなわち法として、至上の命令として受け止め、どのようなささいな理
由も口実もつけないこと、無限の献身性と犠牲精神を発揮して、無条件に徹底的に貫徹
しなければならない」とあり、金日成の教示が全てに先行し、絶対守らなければならないものと
規定している。

さらに、林誠宏氏もまた、

「掟」のシンボルは金日成主席ですから、それに対して忠誠、無条件服従、神格化、
絶対化、としてうけいれること、そういう人間でありなさい、と強調しているわけです。
³²⁾……党の規約というものは本来、党がどんなものをつくろうと、それは労働党の党員がま
もればいいことであって、党員でもない在日朝鮮人や共和国の国民が守る必要はないので
す。³³⁾

と批判している。

確かに、1972年に改正された憲法には、まだ「公民は、言論・出版・集会・結社及び
示威の自由を有する。国家は、民主主義的政党、社会団体の自由な活動条件を保障
する」(第4章第53条)と個人の思想的自由は形式的に憲法で保障されていた。

しかし既に、1972年の憲法改正時において、第1章第4条に「朝鮮民主主義人民共和
国は、マルクス・レーニン主義をわが国の現実に創造的に適用した朝鮮労働党の主体思
想を自己活動の指導的指針とみなす」と、主体思想を人民の自己活動の行動方針とす
ることを明記し、さらに第11条には「朝鮮民主主義人民共和国は、朝鮮労働党の領導の
下ですべての活動を進行する」と、朝鮮労働党が全ての人民の活動を指導すると明記して

31)林誠宏「『金日成主義』を問う」(『季刊三千里』三十七号 三千里社 1984年2月 p.136)

32)上掲書 p.136

33)上掲書 p.136

いる。このため、憲法より主体思想を基本理念とする朝鮮労働党の指導理念「金日成主義」が優先されるのは、北としては当然のことと言える。

これに対して、林誠宏氏は、

資本主義でも社会主義でも近代国家には党があって、党の規約がある。しかし、内容的に党の規約が優先して、たとえ権力は党が握っていても、少なくとも前面には法律が出てくるはずだ。全面的に「掟」が法を押さえ込むという傲慢さは、奴隷主の思想以外のなものでもないといえるでしょう。³⁴⁾

と、金日成主義の人間論というのは、抽象的でなくきわめて具体的で、「掟」に従う人間、これがチュチェ型の人間と述べている。つまり、「金日成主義」の仕組みは、金日成が奴隷主で、人民が奴隷と言う思想に過ぎないとまで言い切っている。

4. 英雄史観として

林誠宏氏と姜在彦氏の対談は、北において歴史が金日成の英雄物語として作り直されていることにも触れ、姜在彦氏は、

初期のものは民族主義には否定的であっても、社会主義運動に対してはもっと広範囲に扱って評価していました。ところが、1960年度代の第四回党大会があった頃から、社会主義運動のなかでも、1930年代の金日成を中心とした抗日パルチザンだけの記述になってきた。そして、最近では、抗日パルチザン闘争全体を包括するのでもなくて、金日成個人の指導による闘争だけが強調されるというふうに、だんだん変わってきています。だから、韓国で「学生の日」として記念されている1929年11月から翌年三月までの光州学生抗日運動なども、共和国の歴史記述ではほとんど触れなくなってきた。³⁵⁾

朝鮮大学の歴史学科の副教授が著した『朝鮮史年表』には、日本による韓国合併から解放までを56ページから81ページまで多くのページが裂かれて記述されているが、全てが金日成に関するものである。「1866年9月2日：金日成の曾祖父金膺先生をはじめピョンヤンの人民が「シャーマン」号を大同江で撃沈」³⁶⁾と全く歴史的に検証できない曾祖父の話から始まり、金日成が青年になり活動するまで、「1912年：この年の冬、金享稷

34) 上掲書 p.p.136~137

35) しょう経書 1984年2月 p.138

36) 鄭晋和編『朝鮮史年表』雄山閣 1992年(第三版) p.45

先生、平壤崇実中学校で反日反米同盟休校を指導」³⁷⁾「1916年春：金享稷先生、反日運動の活動舞台を万景台から江東郡烽火里に移す」³⁸⁾「1917年3月23日：金享稷先生らの指導により反日地下革命組織『朝鮮国民会』³⁹⁾を結成」と、1926年に死亡するまで、金日成の父金享稷が反日闘争を指導したと記載されている。

金享稷が死亡した1926年だけとっても、左翼の立場から高峻石⁴⁰⁾が著した年表には、「1月3日：プロレタリア女性同盟総会、ソウルで開く」「2月：姜達永を責任秘書とする第二次共産党と、権王高を責任秘書とする第二次高麗共産青年会を組織」「4月14日：火曜会、北風会、無産者同盟会、朝鮮労働党の4団体を合同して正友会を結成」「6月10日：朝鮮王朝最後の王・純宗の葬儀が行われるのを利用して一大独立運動＝6・10万歳運動展開」「7月・17日：第二次朝鮮共産党事件始まり、責任秘書姜達永ら検挙される」「9月2日：第三次共産党(ML党)を組織(臨時責任秘書に金鋸洙)」「12月6日：朝鮮共産党第2回大会、ソウルで開催(第三次党の責任秘書に安光泉)⁴¹⁾と、多くの重要事件が載せられているが、そこには金享稷の記事は一切見られない。しかし、『朝鮮史年表』では、金享稷の記事一色に塗り潰され、他の事件は削除されている。

金享稷の記事を確認できる資料はない。さらに、金享稷像はレーニンの父親をまねたものと、李命英はその著書『金日成列伝』の中で暴いている⁴²⁾。また、金享稷の妻康盤石はキリスト教徒であり、その父康敦煜はキリスト教長老会の牧師であったので、金享稷もキリスト教徒であったと考えられ、共産主義者よりも民族主義者に近かったとの証言も、李命英の著書『金日成列伝』に記載されている。金享稷の死亡後は、金日成の抗日独立武装闘争の記事一色となる。即ち、金日成につながる輝かしい神聖な家族の家系があり、その後に民族の英雄として金日成が登場するのである。

これらのことは、『季刊三千里』12号において、姜在彦氏が「祖国・歴史・在日・同胞」という論文で、『朝鮮史』(朝鮮大学 歴史学研究編)では、三・一運動の以後の抗日独立闘争の記述がない。また、三・一運動における民族主義者の行動を「ブルジョア的な限界内で独立を達成しようとする、醜い政治投機行為であった」と書かれていることを批判している。確かに、三・一運動は、思想的限界はあったが、日帝下における民族

37)上掲書 p.57

38)上掲書 p.57

39)上掲書 p.58

40)高峻石は、1910年に済州道に生まれ、早稲田大学に留学したが治安維持法違反事件で中退、その後共産主義者の立場から抗日独立闘争を繰り広げ、解放後、朝鮮産業労働調査所書記、『産業労働時報』主宰、『ウリ新聞』主筆、朝鮮民主主義民族戦線中央経済対策委員、朝鮮共産党・南朝鮮労働党員、朝鮮労働党南朝鮮政治工作委員会委員などを歴任。主活動地は日本で、解放後、金日成主義に囚われず、左翼の立場から朝鮮人独立闘争、解放後の革命運動を書き著してきた。

41)高峻石『在日朝鮮人革命運動史』拓殖書房 1985年 p.444

42)林隠『北朝鮮王朝成立秘史一金日成正伝』自由社 1972年 p.231

解放運動として、共産主義者の間でも一定の評価を得ている。⁴³⁾

さらに、北で出版された『朝鮮を抹殺しようと策動した日帝の罪惡に満ちた歴史』(朝鮮語版 社会科学出版社 1973年)では、民族主義者に対する姿勢は厳しく、「この時期(1910年代)に、わが国の民族解放闘争の卓越した指導者金享稷先生が組織した革命出版活動は、日帝の朝鮮語抹殺策動に甚大な打撃を与えた」⁴⁴⁾と述べ、1920年代から30年代における朝鮮語活動には一言も触れていないことを指摘した。しかし、当時は北には朝鮮語学会の辞書編纂事業の中心メンバーであった李克魯らがまだ生きており、その事業の蓄積は北の最初の『朝鮮語辞典』編纂に寄与したはずである。このように、『季刊三千里』において、姜在彦氏は、北での金日成以外の民族解放闘争を認めない歴史の捏造を批判している。

そして、このような民族の英雄金日成創りの集大成として金日成主義がある。先ほどあげた『朝鮮史年表』で、さらに興味を引くのは、「1930年6月30日：金日成主席、長春県卡倫で開かれた共青と反帝青年同盟の指導幹部会会議で『朝鮮の進路』の報告を行い、チュチェの革命路線を提示」⁴⁵⁾、また「1945年10月10日：金日成主席のチュチェ思想を指導理念とする朝鮮共産党一北朝鮮共産党中央組織委員会創建」⁴⁶⁾と、主体思想は、金日成の独立運動の指導理念として、そして解放後の建国理念としてあったと記載している。しかし、このような記事は、北で出版されたものでも主体思想成立以前の歴史書では見られない、主体思想成立以後に捏造された歴史である。

金日成を唯一民族解放の英雄と捉えることによって、その金日成が創造した金日成主義は絶対的なものとなり、さらに金日成主義の存在によって、単なる指導者でなく民族解放の偉大な英雄として首領金日成同志が保障されるのである。

林誠宏氏は、このような状況を、

私が一番恐れるのは共和国にいる人民たちなんです。国外にいるわれわれは、朝鮮史を専門に勉強しなくとも、民族運動史を含めてある程度のことは分かりますけど、共和国の国内にいる人たちは、これが歴史だと思うわけでしょう。そうすると外側が見えなくなる。南の地にいる同胞に対して理解をもつような歴史的・思想的構造が失われてしまいます。統一においても、大きなネットと言わねばなりません。⁴⁷⁾

と、反対することを許さない環境をつくり、南と分かり合える歴史的・思想的理解が失われることに対して憂慮している。

43)姜在彦氏「祖国・歴史・在日・同胞」(『季刊 三千里』 十二号 三千里社 19年月 p.36)

44)上掲書 p.37

45)鄭晋和『朝鮮史年表』雄山閣 1992年(第三版) p.66

46)上掲書 p.82

47)林誠宏「『金日成主義』を問う」(『季刊 三千里』 三十七号 三千里社 1984年2月 p.p.138~139)

5. 異論を許さない

72年改正の憲法は、まだ「公民は、言論・出版・集会・結社及び示威の自由を有する。国家は、民主主義的政党、社会団体の自由な活動条件を保障する」(第4章第53条)と、個人の思想的活動の自由は形式的に保障していた。しかしこれは、同じ72年改正憲法第1章第4条の「朝鮮民主主義人民共和国は、マルクス・レーニン主義をわが国の現実に創造的に適用した朝鮮労働党の主体思想を自己活動の指導的指針とみなす」や第1章第11条の「朝鮮民主主義人民共和国は、朝鮮労働党の領導の下ですべての活動を進行する」のように、主体思想の活動しか許さないと書かれた項目とは明らかに矛盾するものであった。

このため、92年の憲法改正では思想的活動の自由を記した項目は削除され、さらに72年改正憲法第1章4条の「朝鮮民主主義人民共和国は、マルクス・レーニン主義をわが国の現実に創造的に適用した朝鮮労働党の主体思想を自己活動の指導的指針とみなす」が、「朝鮮民主主義人民共和国は、人間中心の世界観であり、人民大衆の自主性を実現するための革命思想である主体思想を自己活動の指導的指針とする」(92年改正憲法第1章第3条)と、マルクス主義という言葉は削除され、主体思想の独創性だけが強調されている。さらに、第10条「朝鮮民主主義人民共和国は、労働階級が領導する労働同盟に基礎を置く人民全体の政治思想的統一に依拠する。国家は、思想革命を強化し、社会のすべての成員を革命化、労働階級化し、全社会を同志的に結合された一つの集団にする」と、主体思想による全人民の思想統一を明記している。これは、金日成主義に対する異論は許さないと、憲法が宣言しているのに等しい。

さらに、北において、思想教養と思想闘争がどのように行われているとかと言えば、「思想教養と思想闘争を基本的な内容とする『思想戦』は、全ての勤労者を敬愛する首領金日成同志の真の革命戦士に育成する、最も有力な人間改造方法となる」(『勤労者』1974年第5～6巻 p.18)⁴⁸⁾と、全勤労者を金日成のためなら、命を捧げられるような人間に改造することである。また、「『思想戦』の方針は思想教養と思想闘争を統一した過程で推進することにより、人々の思想観点、思考方式、事業態度と活動方式、地形方法と事業作風など全ての面で根本的転換をもたらす、偉大な人間改造方法である」(『勤労者』1974年第5～6巻 p.17)⁴⁹⁾と、思想教養と思想闘争を同一の範疇と見なす統一した過程と捉え、正常な勤労者を全てを思想闘争の対象にし、思想戦を通して主体的な人間に改造するのが目的であると、「思想戦」の目的を明確に示している。ここに、金日成主義に対しての異論は許されなく、またそれは存在しいものとなった。

48) (林隠『北朝鮮王朝成立秘史一金日成正伝一』自由社 1972年 p.255)からの二次引用

49) (上掲書 p.255～256)からの二次引用

このような金日成主義を受け入れた総連に対し、林誠宏氏は、

問題をもう少し限定しますと、金日成主義と総連の関わりも大きな問題を持っていると言わねばならない。総連というのはもともと大衆団体であり、在日の我々の生活や人権を守り、祖国統一に寄与するための大衆団体であるはずなのに、最近の総連のピラを見ても、日本人の前で公然と総連は共和国の大使館であるといっているわけで、いまや金日成主義信奉者たちの拠点になっています。少なくとも、かつてわれわれの先輩や一世の人たちが努力して創りあげた大衆団体ではなくなっているんです。50)

「金日成主義」をその指導理念としたことによって、総連は大衆団体でなくなり、金日成主義心棒者の巣窟と化していると批判し、さらに、これは裏切り行為であるとのべている。

姜在彦氏は、

われわれは金日成主義に対して、率直に疑問を提出し、批判すべきところは批判するという姿勢で、いま話しているわけですが、「党十代原則」によればこれも問題になる。その(三)に「偉大な首領・金日成同志の権威を絶対化することは、我が革命の至上要求であり……」とし、その4番目の項目では「偉大な金日成同志の権威と威信を打ち壊すような、どんな小さな要素も非常事件かして、非妥協的な闘争をくりひろげなければならない」といっている。つまり、金日成主席に納得できないことがあって率直に疑問を提出することさえも「非常事件化」して、「非妥協的」に闘う、というんですからね。

と、批判が許されなくなった総連の現状を嘆いている。この前の項目が、「偉大な首領・金日成同志の絶対的な権威と威信を百方から擁護し、現代修正主義とさまざまな敵対者の攻撃と非難から首領をしっかり保衛しなければならない」とあり、批判が許されないのではなく、無条件それを守りぬかなければいけないのである。これらを相して林誠宏氏は、

金日成主義を批判する者は、社会主義的立場であろうが、民族主義的立場であろうが、敵対関係にならざるをえないということでしょう。51)……異論は聞かないとなったら、もはや統一は望めないと思うんです。金日成主義批判の意味がどこにあるかといえば、そこなんです。今日、朝鮮民族にとって、社会主義者はもちろんのこと、社会主義者以外の人たちにとっても、祖国統一是最優先の課題、リアリティな意味で最優の課題ですからね。それゆえに、金日成主義批判の今後の重要な課題も、そこに関わってあるのではないかと私は思うのです。52)

50)林誠宏「『金日成主義』を問う」(『季刊 三千里』三十七号 三千里社 1984年2月 p.140)

51)上掲書 p.141

52)上掲書 p.141

異論を認めないということは、統一放棄したに等しい。ここに、林誠宏氏の金日成主義批判の本質があるといえる。最後に、結論として姜在彦氏は、

祖国統一への道は対話の方法しかないわけです。ところが「党十代原則」によれば、金日成主義を絶対化しなければいけない。そうすると対話の余地がないわけです。ですから、こういうのを読むと気が滅入ってしまう。しかし、我々は絶望してはいけないと思う。何とか民族内部の思想・信条を越えて対話ができるようにしなければ、統一の道も開けないんじゃないか。53)

全在日を網羅して祖国統一を語ることは、最早、北や総連には出来ないと述べ、この対談は終わっている。

5.おわりに

『季刊三千里』において金日成主義を評して、北が言うようにマルクス主義を発展させた独創的に創造された社会主義革命路線ではなく、ただ独裁政権を維持するための国の法を越えた「掟」に過ぎないと結論付けている。さらに、『季刊三千里』は、金日成主義によって思想を統一することによって、人民に対し労働党(金日成)への奴隷化を強要するもので、その根本理論である主体思想のいう主体型の間人とは、奴隷化した人間であり、それを在日にも適用しようとしている、と批判した。『季刊三千里』における金日成主義批判は、その主義に思想的価値がないだけに、即金日成批判とも言える。

総連は、この金日成主義を指導理念として受け入れることによって、在日の代表をする大衆団体としての立場を放棄し、北の公民団体に陥ったといえる。これは、総連の創立理念に反するもので、血を流し組織を守ってきた者達への裏切り行為であり、祖国統一にとって妨げでしかない『季刊三千里』は批判している。

今まで総連が『季刊三千里』の編集委員を裏切り者と罵ってきたが、ここでは反対に『季刊三千里』が総連を裏切り者と批判している。しかし、お互い裏切った対象が異っている。『季刊三千里』は北即ち金日成を裏切ったのであって、総連は在日を裏切ったことになる。そこに、『季刊三千里』と総連との対立の本質が見えてくる。即ち、「在日擁護」対「北擁護」の対立構造であったと言える。

当時、在日にとって最優先の課題が祖国統一であった。祖国統一を望む心に誰も異論を挟むことが出来なかった。その祖国統一を指導する能力を欠いた総連は、在日にとって

価値がなく、また妨げの存在でしかない。この『季刊三千里』による総連批判は、単に総連にだけ向けられたものではない。『季刊三千里』の論調は、金日成主義を批判することによって、金日成まで批判したと言え、北との決別を宣言したものである。

さらに、『季刊三千里』において、朴慶植氏が在日朝鮮人運動史を、創刊号から第七号まで連続 7 回に渡って掲載しているが、そこには金日成の影響は全く見られない。さらに、『季刊三千里』において、北の立場から語られたものはない。

『季刊三千里』の立場は、反総連を越えた反「朝鮮民主主義人民共和国」と結論づけられる。

【参考文献】

- 『季刊 三千里』 創刊号 三千里社 1975年2月
 『季刊 三千里』 二号 三千里社 1975年5月
 『季刊 三千里』 三号 三千里社 1975年8月
 『季刊 三千里』 四号 三千里社 1975年11月
 『季刊 三千里』 五号 三千里社 1976年2月
 『季刊 三千里』 六号 三千里社 1976年5月
 『季刊 三千里』 七号 三千里社 1976年8月
 『季刊 三千里』 十二号 三千里社 1977年11月
 『季刊 三千里』 三十七号 三千里社 1984年2月
 林隠『北朝鮮王朝成立秘史一金日成正伝一』自由社 1972年
 鄭晋和『朝鮮史年表』雄山閣 1992年(第三版)
 伊藤一彦他訳『朝鮮はどうなっているか』三・一書房 1980年
 高峻石『在日朝鮮人革命運動史』拓殖書房 1985年
 梶村秀樹『朝鮮近代の民衆運動』(梶村秀樹著作集 第四卷)明石書店 1993年
 在日朝鮮人史研究会編『在日朝鮮人史研究』巻一～五 アジア問題研究所 1977年～
 1989年
 鄭銀淑『今の北朝鮮』中経の文庫(中経出版) 2008年
 『植民地帝国日本』(岩波講座「近代日本と植民地」1) 岩波書店 1992年
 『帝国時代の構造』(岩波講座「近代日本と植民地」2) 岩波書店 1992年
 『金日成誕生50周年記念研究論文集』チュチュエ思想国際研究所(東京) 1992年

要 旨

『季刊三千里』において、金日成主義を評して、北が言うようにマルクス主義を発展させた社会主義革命路線ではなく、ただ独裁政権を維持するために、人民に対し労働党(金日成)への奴隷化を強要するものに過ぎなく、さらに、その根本理論である主体思想のいう主体型の人間とは、奴隷化した人間を示すと結論付けている。

さらに総連に対しては、金日成主義を指導理念として受け入れることによって、在日を代表とする大衆団体としての立場を放棄し、北の公民団体に陥った。これは、総連の創立理念に反するもので、血を流し組織を守ってきた者達への裏切り行為であり、祖国統一にとって妨げでしかないと批判している。

今まで総連が『季刊三千里』の編集委員を裏切り者と罵ってきたが、ここでは反対に『季刊三千里』が総連を裏切り者と批判している。しかし、お互い裏切った対象が異っている。『季刊三千里』は北即ち金日成を裏切ったのであって、総連は在日を裏切ったことになる。そこに、『季刊三千里』と総連との対立の本質が見えてくる。即ち、「在日擁護」対「北擁護」の対立構造であったと言える。

当時、在日にとって最優先の課題が祖国統一であった。祖国統一を望む心に誰も異論を挟むことが出来なかった。その祖国統一を指導する能力を欠いた総連は、在日にとって価値がなく、また妨げの存在でしかないことになる。ここに、金日成主義批判の本質があった。

この批判は、単に総連にだけ向けられたものではない。『季刊三千里』の論調は、金日成主義を批判することによって、金日成まで批判したと言え、北との決別を宣言したものである。

以上から、『季刊三千里』の立場は、反総連を越え反「朝鮮民主主義人民共和国」と結論づけられる。

キーワード：主体思想、金日成主義、『季刊三千里』、総連、林誠宏、在日

투 고 : 2011. 5. 31
1차 심사 : 2011. 6. 11
2차 심사 : 2011. 6. 25